

冬のソウル



レポート：南雄三 2012.1.1-1.3

2012正月は家族でソウルへに行きました。

※1000ウォン=80円

<危> ソウルの金浦空港には赤軍派によるよど号ハイ

ジャックの記憶が・・・北朝鮮に飛べという脅しに、飛んだふりをして金浦空港に着陸。韓国兵が朝鮮人民服を着て「平壤到着歓迎」のプラカードを挙げるなど偽装工作をした。当時はかなり大胆なことをしていたのだと振り返ります。

徴兵制度がいまもあり、ベトナム戦争では「やたらと強い」「兵舎のガラス一枚持ち帰る」といわれた韓国軍・・・日本とは違った緊張と訓練された兵士の姿が想像されます。

<寒> 暮れの19日に金正日総書記死亡のニュースが流

れ、日本からの旅行にキャンセルが続出。でもわが家は迷うことなく出発しました。家族四人で危険地帯に行くのですから少しは躊躇すべきでしょうが、なぜか「どうってことないよ」という自信がありました。

<熱> 現地もそのとおりに緊張した空気は微塵もなく、

よく晴れた空の下を送迎バスがホテルまで我々を運びます。中で現地のガイドさんが愛想よく説明してくれ、「私の携帯電話番号書いておきましたから、何かあったら電話してください」とメモをくれました。

欧州でガイドに「携帯の番号教えてください」と聞けば「えっ、そんな」と拒否されます。携帯に電話されると料金が掛かるので怖がるの

です。日本の添乗員に聞けば「時間外は困ります・・・」と拒否されます。韓国のガイドさんを見てみると「よく働く」「情熱がある」と感心させられます。日本が失った何かが見えてくるような・・・。



<寒> それにしてもソウルは寒い。ヒートテックの長

袖シャツとモモヒキを履いて、靴下を二枚履いて、腰と背中にカイロ・・・それでも夕方以降は震え上がるほど。最高-1℃、最低-8℃くらいで、札幌と同じくらいでしょうか。札幌も立派な都市ですが、やっぱり地方都市。寒いから当然とわれわれはみてしまいましたが、ソウルはこんなに寒いのに東京と張り合う大都市・・・ガッツを感じてしまいます。

<食> 驚くほどに食べるものは安い。綺麗な店でまとも

に食べても一人千円もいきません。

●東大門の近くの汚い路地にある鶏鍋料理の店は行列ができる人気店。やっとこさ順番が回ってきて・・・席に着いた途端に「鶏何匹？」と聞かれ、「2匹」と答えたら、それがすべて。鶏が二匹入った鍋がガス台の上に乗せられて、ただ煮込むだけ。煮えてきたら店の人が来て、肉をハサミでバンバン切って「さあお食べ・・・」



この肉がシンプルに旨い。ただひたすら肉を食べて、その後うどんで終わり。なんとなく戦い終わった充実感を味わった後で払ったお金がたったの3000円。

●屋台も面白い。ドラマでよく出てくるトッポギにトライしてみると「皿か、カップか」とオバサンに聞かれ「カップ」を選ぶ。皿だと160円、カップだと80円。隣で小学生が皿で注文したので負けた気分。オバサンが



おでんのスープを紙カップに入れて「これも飲みな」とくれました。トッポギは甘いケチャップのソースを付けて食べるお餅のようなもので、これが結構旨くて気に入りました。

●**食で高いのが**宿泊したロッテホテルのビュッフェの朝食・・・なんと5000円もする。なのに行列なのでやめて、外に出て鱈のスープ屋さんで食べると一人300円。

●**困るのは**、席につくと直ぐに色んなキムチが幾つものテーブルに並ぶし、色んなものを注文しても、あっという間に、一斉にもってくるから、スケッチするのが間に合いません。なぜ韓国料理はこうして直ぐにもってくるのでしょうか？



●**韓国で一番嫌らしいのが**ステンレスの箸。重いし、薄っぺらいし・・・なんとしてもうまく使えない。子どもの頃から箸の持ち方がおかしくて、そのまま直せないう自分にとって、この韓国の箸は拷問に近い。箸だけじゃない、箸とスプーンがセットになっていて、ご飯や汁ものはスプーンで食べる。お椀を持ち上げてはいけなくてスプーンでご飯や汁物を飲む。お椀を口にもって行ってすすれば済むものを・・・スプーンでちょっとずつすすらなければいけない。箸でもたつき、スプーンでイラツキ・・・韓国ドラマだと食べてるシーンはカワイイのだが、自分がするのは地獄のようだ。



●**柚子茶** (ユジャチャ) や五味子茶 (ゴミジャチャ) のような伝統茶というのがあって、これが旨い。中国や日本の茶とは違ってエキスに満ちた重厚な味。さすがに高く400円とか500円。ご飯より高い。



●**残念なのが珈琲**。なんでこんなに薄いのか？スタバならと思ったがスタバでさえ薄い。もともと韓国の人はコーヒーが好きでなく、ドラマ「コーヒープリンス」が大当たりしたことによって一挙にカフェブームが起こったと聞いたが、こんな薄味じゃ珈琲のおいしさはわからない。

<観> ●**建築屋として**面白かったのはやっぱり伝統的な韓

屋 (ハノク) の町並みがみれる北村、そして裏路地にある西村。北村の家は立派で、貴族階級だった両班/ヤンバンが奴婢/ぬひを使って生活していた豪邸。ドラマのチュノ (推奴) でそういった身分制度の冷酷非道さを味わった自分だから、軒先をツンととがらせた両班屋敷をみると戦いたくなってしまう。



●**一方、現代ドラマでよく出てくるのが**貧しい住民が住む裏路地の家。ドラマではなぜかいつも坂を上り、右に左に曲がっていきながら門を開けると中庭があり、そこに板張りの縁台 (ピョンサン) があります。この縁台は腰掛けたり、上がってご飯を食べたり、野菜を置いたり・・・となんでもありの便利な台で、韓国ドラマには欠かせない存在。中庭にはキムチの大きな壺が脇に置かれていたりします。そんなドラマでみた生活がそのまま見れるとやたらと親近感が湧いてきます。



●**サムソン美術館/Leelum**

2004年オープンの美術館で、3つの建物の設計はなんとマリオ・ボッタ、ジャン・ヌーヴェル、レム・コールハースによるもの。それぞれが自分らしさを表しています。展示物はどうしても建築屋なら行かすにはいられない美術館。



●**東京も負けるほど**の高層ビルが建ち並ぶ一方で、昔からの汚れた中低層の商店建築があって、その韓国くさい看板のラッシュも迫力があって面白い。



●**こうした薄汚れた建物を**上手にリフォームしておしゃれなカフェができています。西村、北村にはこうしたカフェが沢山あって楽しめる。



<浴> **韓国といえばアカスリ**。

サウナに入って風呂につかって、アカスリをすれば体はぼつかぼかできくた。サウナと風呂だけならたったの800円で何時間でも入れる。アカスリは1600円。オンドル (床暖房) の休憩室で男女が一緒にいれるし、食べれるし、TVもみれるし、24時間営業だから寝泊まりだってできる。

夜中の12時になってもどンドン客がやってきて、その中には日本人の若い女性二人というのも少なくない。24時間営業のショッピングビルで買い物してから、ひと風呂浴びて帰る姿は「手慣れたもの」と見受けられた。大きな荷物抱えてやって来るカップルの旅行者・・・これは宿屋代わりだとみえる。



<旅> いまやソウルツアーは若い女性に大人気だという。そういえばホテルまでの送迎バスの中で男は私一人だった。近いし、何を食べても安いし、外にできればショッピングの天国。夜中まで買い物していれば時間が過ぎ、サウナに入ってエステに興じれば肌もピッカピカ。

安い、旨い、買物、癒し・・・加えて韓流ドラマ、K-pop・・・若い女性もオバサンもソウル大好きになる理由がわかるというもの。金浦空港は免税店はしょぼいがかいアウトレットがあって圧倒される。ここまで来てはまだ買えというのか。

<言> ドラマを毎日みているお陰で韓国語には全然違和感がありませんでした。

そんな私でもハングルには参りました。ハングルは発音記号のようなもので、覚えれば誰でも発音できるようになるのだからよそ者にとってもありがたいことは認めるが、読めない者にとっては意味不明な記号でしかありません。

日本人にとってアルファベットなら読めるし、漢字からなんとなくわかるけどハングルはアラビックと同じでなに1つわからない暗号のようなもの。ハングルに囲まれてしまうと、「暗号」を解けと強制されているようで気持ち悪くなってきます。

<国> 韓国人同士が激しく言い争っているのをみると気性の激しさを感じます。

ドラマでも言い争うシーンが多くて日本人には違和感です。中国もそうだし、ヨーロッパでもアメリカでもそう。つまり日本人がおっとりしすぎているのでしょう。

言い争いたくないから遠慮して、我慢して・・・大人しくて優しいから日本人はイイ、でもほんとは何を考えているかわからないから怖い。日本に来た留学生の誰もが一年目はこんな風に怖がるといいます。その内には自然体としての礼節を理解すると、日本人の心の深さに惹かれているといいます。

この余裕は海に囲まれた単一国家の純粋培養によるもの。ソウルを北上すればすぐに北朝鮮国境という緊張を抱える韓国とはまったく違った環境にあり、欧州だって、アメリカだって同じこと。日本はこうして幸せだが、こんな能天気なまま世界を相手に経済競争で戦っていけるのか・・・いや、そんな平和を羨ましく思わせることが世界平和に貢献する道でもあって、平和だから無駄に戦わず、その分仕事に真心を入れれば、経済力でも世界に負けることはないだろう。

<親> ソウルで地図を広げたら「どこいくの?」と通行人が声を掛けてくれます。

親切・・・なぜこんなに親切・・・といぶかしくなるほどだが、これがソウル。場所が分からなければスマホで探してくれるし、サウナの店に電話して聞いてくれたりもする。日本人が遠慮と我慢の余裕をみせる時に、ソウルでは親切にできる余裕をみせてくれます。日本の若い女性たちが安心してソウルに行く理由はこんなところにもありそうです。

<商> こうしてソウル観光は日本の若い女性ターゲットに大成功。日本から韓国

に行く観光客は300万人いて、ソウルにやってくる外国人観光客は年間780万人（2009韓国観光公社）、日本に来る外人観光客は861万人（2010年・日本政府観光局）。お互いに観光では好ライバルである。

観光に来る外国人の動機は、日本では「買う・伝統/歴史・温泉」というが、韓国の場合は韓国ドラマが誘い水になっているという。韓国ドラマブームは日本だけではないようです。日韓観光競争・・・お互いに知恵を絞り、お互いの持ち味を出して勝負すれば、お互いに観光収入を拡大させることができるのでしょうか。

